



巧言令色鮮仁

「チェンジ (Change)」「イエス・ウィ・キャン (Yes we can)」の繰り返しだけでアメリカの大統領になったオバマ氏の就任式後の支持率は、就任直前の 84%を 16%も下回る 68%であった。しかも「意見なし」が 21%もあったことから見れば「期待感バブル」は早くもしぼみ始め、人々は「実績を見てから判断しよう」と思い始めているようだ。オバマ氏の演説は、たしかに人を引きつける雰囲気醸し出し、上手いと言わざるを得ない。また、オバマ氏の自叙伝を読んだ曾野綾子女史は、最高のノンフィクションライターだと絶賛している。しかし、文章が上手ければ小説家になればよいし、演説が上手ならばアジテーターになればよい。政治化には何よりも果敢にして確実に成果を挙げる実行力が求められる。

オバマ氏は政府の人事において、ヒラリー国務長官を始めワシントンの既成政治家に多くを委ねているところから、就任前において、すでに「オバマ氏は変革の政治家ではなく、現状の政治を行っているように見える」(クリントン氏の元顧問ディックモリス氏)と言われていた。

また、オバマ氏は、国民皆保険や中間層への大減税など 500 を超える公約を濫発しているが、すでに大統領令を発したグアンタナモ収容所の廃止やイラクからの 16 カ月での米軍撤廃は、現実にはいずれも大きな壁にぶつかり、その目標達成は困難視されている。就任式当日もウォールストリートジャーナルが、「不透明な希望」と題した社説で書いているように、「オバマ氏の政治的性格はとらえどころがなく、不透明なものがある」、不人気や犠牲も覚悟の上で「国益にかかわる難しい決断を下せるかで真価が問われる」のであろう。

口先だけの「改革」は何ももたらさないのみならず、むしろ害悪である。

我が国においてもマスメディアに踊らされての改革が流行したことがあり、また現に流行しつつもある。郵政改革、公務員改革、地方分権改革などその種の改革は枚挙にいとまがない。しかし、それらの改革にはいずれも大きな落とし穴があった。

例えば郵政改革の波が去った跡には、事業の効率性や過疎地の住民の利便が阻害されているのではないかと。厳しい官僚バッシングの中での公務員改革では、いつの間にか行政から優秀な人材を遠ざける結果を生んでしまった。「三位一体」の地方分権改革では、逆に地方自治体の財政難をもたらしてしまった。更に細かい事例を挙げるならば、多様な労働の形態を認めようとした労働者派遣の制度は、不況下においては、あろうことか多くの失業者を生むにいたった。また医師の臨床研修制度の改革において、医師が自由に研修先を選べるようにしたため、地方の公立病院での医師不足が生じ、地方医療に大きな穴が開いてしまった。

このような将来への洞察力を欠いた無責任な改革はもう沢山である。

今ではオバマ氏に対しては、強欲資本主義のツケとして世界中に悪影響を及ぼしている百年に一度の金融・経済危機を上手に克服して貰うことを期待するのみであるが、他者への依存は禁物であろう。

安保条約に基づく日米同盟についてその片務性が指摘されているが、ことは経済についても同様である。米国を始めとする他国への依存を考えるよりは、何よりもまず自国の財政経済の再建について自らの努力を盡くすことが肝要である。

最近のとどまることを知らない少子化の急激な進展と高齢者の急増に照らして見れば、高齢者の年金、医療、介護を支える現役世代の負担を更に増やしていかなければ、ただでさえ膨大な赤字を抱える国の財政の再建が期し難いことは、火を見るより明らかなことである。

麻生首相が固執している「消費税」の増税は国政にとって必須の課題である。政治家と

しては、選挙民にとって「痛み」と感ずる政策を敢えて推進することが大切であろう。政治家に求められることは、オバマ氏のように口先で選挙民に迎合することではなく、国民に対し敢えて自己犠牲の精神の発揮を訴えることである。

論語に「巧言令色鮮（すくなし）仁」とある如く、「巧言」は唾棄すべきものであって、同じく論語に「剛毅木訥は仁に近し」とあるように、なにものにもめげぬ強い意思を持ち、話し下手でなんの飾りけもない人こそ東洋道徳の中で最高の「仁」（自己抑制と他者への思いやり）を備えた人であることに思いをいたすべきであろう。